

## 李忠建 研究員

去る2022年10月、人と自然の博物館は開館30周年を迎え、新収蔵庫棟「コレクションナリウム」が一般公開されました。来館者の多くは、1階で自然史標本を永続的に収蔵する意義を学び、ずらりと並んだ鳥類や昆虫の標本を楽しんだ後、本館へと向かいます。

しかし、一部の人の向かう先は、2階の植物標本収蔵室です。収蔵室は温湿度の変化、紫外線、害虫などによる悪影響を防ぐために非公開となっていますが、事前にご相談の上であれば、調査・研究で利用することが可能です。これは植物を扱う職業研究者に限らず、余暇を利用して調査・研究にいそしむ一般市民の場合でも同様です。

ところで、新収蔵室のオープン



にあたっては、50万点の植物標本を移動させ、物理的に再配架する必要がありました。実はこの際、標本の配列を一新しています。

これまで被子植物（マツやスギと異なり、花をつける植物）の標本は、20世紀半ばの新エングラー分類体系に基づいて配架されました。しかし20世紀末以降はDNAによる系統関係の研究が進み、これに基づいたAPG分類体系が台頭しました。

APGの名称は発表者である「被子植物系統グループ」に由来し、改良版の「APG III」（09年）や「APG IV」（16年）は、一般の図鑑でも採用されるほどに普及しています。こうした状況から、当館でも新収蔵室への引っ越しをチャンスと捉え、標本の配列をA

基部被子植物の棚。いわゆる双子葉類の一部で、残りの双子葉類からは単子葉類よりも遠い関係にある



PG体系へと移行したのです。

以前の分類体系は、特徴の一つが被子植物全体を双子葉類と単子葉類（イネなど）に二分し、双子葉類をさらに離弁花類（バラなど）と合弁花類（キクなど）に分けるといふもので、中学校でも教えられています。

しかし、進化的には双子葉類から単子葉類が現れたため、双子葉類の中には単子葉類により近縁なものもそうでないものが混在していました。DNAによる系統関係の研究が進むにつれて、双子葉類の中でもどれとどれが近縁かが具体的に分かってきました。

例えばアリマグミなどほとんどの双子葉類は真正双子葉類と呼ばれ、同じ双子葉類のアリマウマノスズクサよりもむしろ単子葉類に近縁です。このような背景で、APG体系では双子葉類や離弁花類、合弁花類というグループは設けられず、近縁さを重視したグループへの再編が進み、目や科などあらゆる分類階級に適用されました。

新収蔵室では、APG体系を知らない人でも簡単に利用できるよう、対応表や図鑑類、パソコン端末などを備えています。植物の調査を始めたい、再開したいという方は、これを機にぜひご連絡ください。

## ひとはく 研究員 だより

### 新収蔵室

# 植物標本の配列 近縁さを重視